

瀬部の七門徒

熊澤 良嗣 調

平成 25 年 6 月 15 日から 7 月 28 日まで、一宮市博物館で「阿弥陀信仰と木曾川流域」という企画展が開催された。

その解説資料の「浄土真宗の展開」という項に、「木曾川流域に展開した多くの真宗勢力のなかから、今回は瀬^せ部^べ（瀬部）門徒と河野^{かわの}門徒がとりあげられる。瀬部門徒は、帰洛途中の親鸞に^{きえ}帰依し木曾川^せで『瀬踏^{せぶ}み』して見送ったという伝承を持ち、親鸞門第二十四輩の入信房の由緒も伝える。蓮如・実如・証如期の六字名号・方便法身尊像を有し、本願寺教団の有力な地域門徒集団となる。河野門徒も親鸞帰依伝承を持ち、美濃・尾張両地域にわたって展開する」と書かれている。

また別項には「木曾川は何度も洪水によって河道が変わり、室町時代末に現在の位置になったとされています。親鸞が濃尾巡化したといころ、岐阜県岐南町^{きせ}木瀬^せのあたり岐南町の三宅（屯倉）と伏屋の間で国道 2 1 号の南 200m ほどの一帯。今は大きな水路が東西に通じている——に木曾川の支流があり『木瀬の渡し』がありました。文明二年（1470）には蓮如が木瀬の草庵を再興し、河野門徒の道場（尾張羽栗郡河野道場）としました。天文十二年（1544）ころ河野道場は専福寺と改称し、木瀬・正木・円城寺・竹ヶ鼻・加納と移ったと伝えられています」と書かれている。

（上記については「広報かかみはら」に掲載された「木曾川学入門」も参照した）

以上は一宮市博物館で開かれた企画展からの話題であるが、「一宮市史西成編」(昭和 27 年刊行)の瀬^せ部^べの項には以下のことが記されている。

「彼の親鸞上人が木瀬の道場より日比野に移り、足^{あぢか}近（現羽島市北部。美濃路が東西に通

り、親鸞が活躍した頃は木曾川—今の境川—が北端を流れ長良川に注いでいた。境川の南側にあたるため、当時は尾張国葉栗郡と呼ばれていた。1588年の天正大洪水以降は美濃国羽栗郡となった)に赴く時、木瀬の信徒が木曾川の急流を『瀬踏み』したから、以後その人々の住む村名を瀬踏部即ち瀬部と称するに至ったという伝説は、あまりにも請け容れ難い」と記されている。

なお、この前段部分も以下に引用する。(* 追加情報 003 でも既出)

「鎌倉時代の伊勢神宮領を挙げた^{じんぼう}神鳳抄を始め、吉野朝時代の桧垣文書、室町時代の光厳院院宣、観応元年及永和三年の妙興寺文書等には瀬邊と書き、北朝廷文二年の西園寺家文書及室町時代永享元年の三宝院文書、長祿二年の森所蔵文書には瀬部と書し、更に親鸞上人絵伝を始め、観応元年・応安二・永和三年の妙興寺文書及同時代の吉田文書、応永四年・同九年・同十年の三宝院文書等には木瀬又は木瀬田とある。

而してその語源は津田正生の「尾張国地名考」に、『正字^{まへ}瀬方村なり、木曾川下流の大河原所なるべし』とあるが如く、旧木曾川本流の一で日光川の淵源を成す浅井川と般若川との中間に位するより見るも、その地名起因が凡そ推察せらるゝものがある。」

上記のように、西成編では木瀬・木瀬田 = 瀬部とみているわけだが、岐南町にあったという木瀬 当時尾張国に属していた一との異同が明らかでない。

ともあれ、瀬部(村)という地名は木曾川の瀬の部分あるいは瀬の辺りから来ていると考えるのが理にかなっていると思われる。

ところで、日比野とは一宮市浅井町の大日比野のことであり、ここに「瀬部の七門徒」の寺として有名な^{うんぜん}運善寺がある。門前の石碑や案内プレートに寺の由緒などが出ているの

で参考になる。運善寺にまつわる話は次の通りである。

親鸞は越後への流罪が解かれた後も京の都に帰らず、常陸国ひたちに移って布教活動をおこなった。その地で八田七郎はった知朝ともりのりという信心深い武将に出会い、彼に入信房という法名を授けた。親鸞はやがて帰洛することになり入信房は親鸞を慕って京都に向かったが、その途上尾張国日比野にある運善寺で入信房は亡くなった。これを伝え聞いた親鸞はその死を悲しみ、入信房の座像を刻んで運善寺に届けさせたという話である。

この座像のほか犬山城から移築されたという山門など、運善寺には3つの一宮市指定文化財が現存する。

ついでに触れておきたいのは、同じ浅井町の河端こうばたにも勝賣寺（勝宝寺）という瀬部七門徒ゆかりの寺が存在するということである。県道江南木曾川線沿いにあり、よく目にとまる門前の石柱には「親鸞聖人御舊跡」・「瀬部七門徒随一」などと刻まれている。

七門徒は、親鸞に帰依し浄土真宗の寺を起こし布教をおこなった人たちである。瀬部の七門徒と謳いながら、寺が隣の浅井町にあるのは意外な感じがするかも知れない。

しかし七門徒伝承の話題は、関東から帰洛する親鸞が増水した木曾川——今の境川かその南の木瀬を流れる支流（最後は足近を通過して長良川に入るので足近川ともいう）——に進行を阻まれた時、彼らが浅瀬を探って対岸まで送ったという点にある。

信仰心が厚いからそういうことができたのだとは考え難い。やはり彼らは普段から川仕事に携わって木曾川の流れに精通していた人に違いなく、博物館解説資料にも「木曾川流域には河野門徒や瀬辺門徒などの門徒集団があり、その多くは木曾川の舟運に携わっていたともされ、その経済力は本願寺教団の経済基盤を支えました」と書いてある。

[参考]

^{うんぜん}
運善寺 浅井町大日比野字南流 1841

^{しょうぼう}
勝賣寺 (勝宝寺) 浅井町河端字郷裏 16

追加情報 003 「関係地名の由来考 (瀬部 ~ 時之島)」中に「(別項 - 瀬部七門徒参照)」
とある。そこで「瀬部の七門徒」を取り上げてみました。